

令和7年度 並木地域ケアプラザPDCAシート_公表用 (事業計画書、事業報告書、事業実績評価)

—総括表—

◆ 事業計画

地域の現状と今後の方向性

【シーサイドタウン地区】昭和50年代から作られた大規模な団地地区。高齢化率は地区全体では40%程であるが一丁目では約45%と非常に高い。エレベーターが無かったり、隔階止まりだったりする住宅が多く、歩行が困難になると閉じこもりとなるリスクが高くなる。介護保険サービスのニーズに対し、ケアマネジャーが見つかりにくい状況がある。
 【富岡第一地区】丘陵地の戸建住宅からなる地区。高齢化率は25%程であり、戸建て分譲住宅に子ども連れ世帯が転居している。商店が少なく、バス路線から買い物は杉田方面に行く方が多い。丘陵地であるため、歩行が困難になると閉じこもりのリスクが高くなる。
 【今後の方向性】できるだけ住み慣れた地域で自立して生活していけるように、フレイル予防・介護予防を進める。介護保険以外の社会資源を把握・発信・活用し、高齢者の生活を支える。担い手不足が両地区とも課題であり、ケアプラザの事業やつながりを活かし、担い手を発掘していく。第5期地域福祉保健計画の策定に際し、ケアプラザで把握している個の困り事も発信し、計画で取り組めることを地域とともに検討する。

今年度の重点的な取組

新規	継続	—具体的な取組内容—
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	生活支援に資するボランティア団体や民間事業者との連絡会を実施し、高齢者の生活を支える団体同士が連携を図れるように進めて行く。
<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	認知症への理解・普及啓発をチームオレンジの活動を通じて地域で推進する
<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	担当地区における地区社協及び民児協定例会への定期的に参加し、顔の見える関係づくりを行うと共に、地域ケアプラザの自主事業の発信や、相談傾向の共有、個別ケースの相互相談等を実施する。
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	第5期地域福祉保健計画 地区別計画について、地区支援チームの中でも最も地域に身近な支援機関として地域と共に策定する。
<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	要支援者の介護予防ケアマネジメントを適切に実施するため、非常勤職員の雇用の確保・育成・定着させる。

◆ 事業報告・事業実績評価

振り返り

生活支援に資する地域の団体が一堂に会し、お互いを知り、相互協力ができる関係性を築くことができました。チームオレンジ活動については、認知症普及啓発の第一歩として、認知症サポーター養成講座を地域内で多数開催し、サポーターを増やしました。うち2回は当事者参加もあり、当事者理解をより一層深めることができ、オレンジリングの普及にも努めたことで、住民同士の見守り意識と連帯感を高めることができました。各地域の定例会にも、職員全体で出席し、関係構築を進め、地域福祉保健計画も区役所・区社協と協力して地区の策定に積極的に関わりました。2名の介護予防プランナーを雇用・育成し、予防支援計画をお待たせすることなく対応することができました。

区からのコメント

職員体制が十分でない中でも、丁寧な情報共有と連携により相談対応を着実に実施し、地域特性を捉えた取組で資源の“見える化”とネットワーク強化を進めました。また、サロン・放課後の居場所づくりも継続し、多世代の交流とボランティアの広がりを創出するとともに、定例カンファレンス等を通じて区・関係機関と日常的に協働し、地域福祉保健計画の策定にも貢献しました。次年度は、より身近で親しみやすい相談窓口の形成、把握した課題の整理と住民主体の取組との連動、社会資源の周知強化と企画への循環化、早期の人員体制整備と育成の継続、そして区との協働の一層の深化が期待されます。

チームオレンジの取組では当事者・家族の声を丁寧に聞き取り、地域への認知症理解促進に大きく貢献されるとともに、地域ケア会議を通じて地域全体で認知症の方を支える取組等が検討されていました。虐待対応や成年後見制度相談対応では区と連携し、難しいケースにも粘り強く取り組まれています。また、今後もケアマネジャーと地域をつなぐ取組を進めていただくとともに、多様な主体と協働しながら地域を支える取組の発展を期待しています。